

学位請求論文審査報告要旨

2012年3月14日

申請者 鳥 日哲

論文題目 中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造
—日本語母語話者との比較を通して—

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
イ ヨンスク

1. 本論文の内容と構成

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者の語りにどのような特徴が見られるか、表現と構造という二つの観点から、日本母語話者の語りとの比較のなかで明らかにしたものである。

中国語を母語とする日本語学習者の語りは、日本語が高度に運用できるようになっても、日本語母語話者の語りとどこか話し方が異なるという印象を与えることがある。そのような印象がどのような言語的特徴から生じるものなのか、中国語を母語とする日本語学習者の語り、日本語母語話者の語り、それぞれ20名分を収集し、比較・分析を試みている。

また、中国語母語話者の中国語による語りも、同様に20名分収集し、中国語を母語とする日本語学習者の語りの特徴が、母語・母文化に由来するものか、それとも言語学習によるものなのかも明らかにすることを目指している。

本論文の目次は、次のとおりである。

第1部 本研究の前提

第1章 研究の動機と問題の所在

第2章 先行研究の概要と本研究の位置づけ

2.1 先行研究

2.2 本研究の位置づけ

第3章 本研究の調査の方法

3.1 調査材料

3.2 調査の対象

3.3 調査の手続き

3.4 実施期間と場所

3.5 文字化の方法

第2部 語りの基本的特徴

第4章 「絵本との一致度」から見た学習者と日本語母語話者の語りの特徴

- 4.1 日本語学習者と日本語母語話者の語りに関する先行研究と本研究の特徴
- 4.2 研究対象と方法
- 4.3 量的に見る一致度の違い
- 4.4 質的に見る一致度の違い
- 4.5 日本語学習者の「低一致度」表現志向
- 4.6 日本語母語話者の「高一致度」表現志向
- 4.7 日本語学習者と日本語母語話者の語りの基本的特徴のまとめ

第3部 表現から見た語りの特徴

第5章 実質語の使用から見た語りの特徴

- 5.1 日本語学習者の表現に関する先行研究
- 5.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の実質語選択の特徴
- 5.3 日本語学習者の実質語選択に対する母語の影響の検証
- 5.4 表現選択の特徴のまとめ

第4部 構造から見た語りの特徴

第6章 語りの開始部と終結部における特徴

- 6.1 語りの構造に関する先行研究
- 6.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の語りの構造
- 6.3 日本語学習者の語りの構造に対する母語の影響の検証

第7章 接続表現における特徴

- 7.1 接続表現に関する先行研究
- 7.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の接続表現の特徴
- 7.3 日本語学習者の接続表現に対する母語の影響の検証
- 7.4 接続表現のまとめ

第5部 本研究のまとめ

第8章 おわりに

- 8.1 まとめ
- 8.2 残された課題

参考文献

添付資料

2. 本論文の概要

本論文は、5部8章によって構成されている。

第1部「本研究の前提」は本研究の序章であり、3章からなる。

第1章「研究の動機と問題の所在」では、まず、本論文の立場と目的が示される。

従来の日本語学習者の談話の研究では、日本語教育の観点から、日本語母語話者と異なる日本語学習者の話し方の特徴を不自然さおよび、その原因を日本語の習熟度の問題に還元し、いかに日本語を上達させ、日本語母語話者に近づけるかを目的とするものが多い。

しかし、本論文では、日本語学習者の談話の表現や構造に見られる日本語母語話者との違いを、不自然さではなく個性ととらえ、日本語学習者がストーリーをどのように伝えているかに焦点を当て、その語り方の傾向を明らかにすることを目的とすることが宣言されている。

第2章「先行研究の概要と本研究の位置づけ」では、本論文に関連する先行研究が紹介され、そのうえで、本論文の意義が述べられる。

紹介される文献は、学習者のストーリー・テリングに関するものと、学習者のナラティブに関するものに大別され、それぞれ対照修辭学的な見地から説明が施されている。

また、従来の研究は、4コママンガなど、短い素材を使った研究が多く、字のない絵本を用いて比較的長く複雑なストーリーを説明させる本論文の手法が、語りの談話の構造を分析するうえで優位な手法であることが強調されている。

第3章「本研究の調査の方法」では、本研究に用いられるデータの収集方法と文字化の方法について説明がなされている。

調査に用いられた素材は、『アンジェール ある犬の物語』という、ベルギーの作家ガブリエル・バンサンによる鉛筆デッサンによる字のない絵本である。その内容を、日本語母語話者にたいして説明した談話が今回の調査資料である。

調査に参加した説明者は、中国国内の大学学部在籍する日本語学習者20名と、日本国内の大学学部在籍する日本語母語話者20名である。前者は、日本語のレベルをある程度揃えるために、中国の大学で日本語を専攻している、日本語能力試験1級を合格した者に限定されている。

また、日本語学習者に見られる特徴が、母語（中国語）に由来するものか、言語学習に由来するものかを見きわめるため、上記の説明者とは別に、やはり中国国内の大学学部在籍する中国語母語話者20名にたいして、同様の調査が中国語で行われている。

第2部から第4部までが本論であり、構成は次のとおりである。

第2部「語りの基本的特徴」は、日本語学習者と日本語母語話者の語りの全体的傾向の把握が目的となっている。具体的には、第4章「『絵本との一致度』から見た学習者と日本語母語話者の語りの特徴」において「絵本との一致度」に焦点が当てられ、日本語学習者と日本の母語話者の違いが考察されている。

調査の結果、絵本の語りにおいて、日本語母語話者は、絵本に描かれている内容を忠実に再現する描写を好み、心理描写をする場合でも外面からわかる描写に留めるのにたいし、中国語を母語とする上級日本語学習者は、絵本に描かれた内容を脚色して大胆な内面描写を行ったり、絵本に描かれていない説明を語りの冒頭部と結末部に加えたりする傾向があることが示されている。

また、中国語を母語とする上級日本語学習者が脚色や説明を加える背景には、母語の転移による側面と、学習者としてのストラテジーによる側面、その両面が影響していることが明らかにされている。

この第2部のデータを踏まえ、第3部と第4部では、表現上と構造上における個々の特徴を詳細に分析したうえで、中国語母語話者のデータも加え、日本語学習者の語りの特徴とそれが形成された要因について総合的に考察が行われる。

第3部「表現から見た語りの特徴」は、日本語学習者の表現上の特徴を明らかにすることが目的となっている。具体的には、第5章「実質語の使用から見た語りの特徴」で、日本語母語話者との比較から日本語学習者の実質語の使用、とくに名詞的表現の選択が中心に分析されている。

調査の結果、①日本語学習者は場所を表す名詞を用いて、ストーリーの内容を表すときにそれがどこで起きた出来事なのかを説明する傾向が強い、②語りを進めるにあたって、登場人物（犬）に名前をつける傾向が見られるなど、日本語母語話者と著しく異なる表現上の特徴が指摘されている。さらに、母語の影響かどうかを中国語母語話者の語りとの照合によって検証した結果、「主人」「恋人」などの同形語、「車の中」のような「名詞＋方位名詞」において、母語である中国語の影響を受けたと考えられる語句の使用が見られた。

第4部「構造から見た語りの特徴」は、日本語学習者の構造上の特徴を明らかにすることが目的となっている。

第6章「語りの開始部と終結部における特徴」では、日本語学習者の語りの構造を明らかにするため、談話の開始部と結末部に焦点が当てられ、日本語母語話者との違いが追求されている。また、中国語母語話者の語りを分析することによって、日本語学習者の語りの構造を形成している心的要因についても考察が加えられている。

開始部において、日本語母語話者と中国語母語話者は、絵本の出来事以外の情報を加えずにそのまま語るのにたいし、日本語学習者は、絵本の出来事以外の多様な情報、たとえば出来事が起きる原因や理由、場面設定のような背景を盛りこむ傾向がある。また、絵本を見てからその内容を知らない聞き手に伝えるときに自分の感想やコメントをまず提示し、自分からみたストーリーの性格を聞き手に示そうとするとされる。

一方、終結部においても、日本語母語話者と中国語母語話者が絵本の結末を絵本のとおりに伝えるのにたいし、日本語学習者は、絵本のストーリーにたいする感想や内容にたいする評価的なコメントなどを加えて話を終結するとされる。

日本語母語話者と中国語母語話者の語りの開始部と終結部における特徴が一致し、中国語学習者が異なったという結果から、日本語学習者の語りの開始部と終結部の特徴を形成した要因は、日本語学習者が自身の伝達能力に自信がなければいけほど、多くの情報を提示して、その伝達能力の不足を補おうとしたのではないかという理由が語られる。

上記の考察から、日本語学習者の独特な語りの構造は、学習者としてのストラテジーの影響と見られる部分が大きく、学習者としての母語あるいは母文化の影響が希薄であると結論づけられている。

第7章「接続表現における特徴」では、語りの構造における展開の仕方を考察するため、語りの文頭に出現した接続表現をどのように展開しているかという点に注目して、順接、逆接、場面展開、説明と大きく4つに分けて分析が行われている。

その結果、日本語学習者は、①逆接の接続表現が多い、②「突然、急に」などの副詞に場面展開の機能を与えている、③継起的な接続表現がなく、一つ一つの場面が独立している、④ストーリーの展開に起伏が感じられるなどの特徴が挙げられるのに対し、日本語母語話者は、①順接を中心に語りを進めている、②接続表現が話し言葉的である、③継起的な接続表現が用いられ、場面間の関連が緊密である、④ストーリーが淡々と展開されているなどの特徴が見られるとされている。

また、中国語母語話者の語りを分析し、母語の影響があるかどうか検証した結果、日本語学習者には、中国語母語話者の語りにも共通する特徴として、「でも」「しかし」のような逆接が多く、「突然～」などの表現を用いて、場面一つ一つが独立しているという傾向が見られ、これは母語の影響であると考えられている。

一方、日本語の「で、そして」に当たる「然后」「完后」「完了以后」「完了」「后来」を用いて順接で場面を展開していく例も数多く見られ、日本語学習者ではなく、日本語母語話者に近い傾向も見られたとされている。

第5部「本研究のまとめ」の第8章「おわりに」では、論文全体の内容が要約され、残された課題について述べられ、稿が閉じられている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下のとおりである。

第一は、日本語学習者の語りの談話に見られる、日本語母語話者と異なる特徴を、不自然なものとしてではなく、一つの個性として認め、それを方法論に反映させる道筋を切り開いた点である。言語事実に評価を加えず、あくまで実証的に分析した結果、これまで不自然なものとして退けられていた学習者の特徴が、固有の傾向として示された点が画期的である。

第二は、そうした学習者の個性が、学習者の母語あるいは母文化に由来するものか、言語学習によるものであるかを、学習者の母語のデータとつきあわせることで特定した点である。これによって、学習者の特徴が、母語の転移なのか、学習者のストラテジーなのかの峻別が可能になり、学習者の学習言語における対照修辞学的研究の見通しが、かなり改善されたとと言える。

第三は、語りの談話の表現だけでなく、構造までも明らかに示した点である。従来の研究では、どうしても短い表現の選択への考察に留まることが多かった。しかし、本論文

では、絵本を素材にしたことで、語りの談話の冒頭部と結末部、さらには接続表現による展開に着眼することが可能になり、これまであまり指摘されることのなかった談話のグローバルな構造をあぶりだすことに成功している。

このように優れた成果をもたらした本論文であるが、問題点も存在する。

第一に、先行研究で言及された文献が学習者の語りを扱う談話が中心であり、それによって、研究の視野がおのずと狭まった点が挙げられる。

もちろん、本論文と直接関係のある文献は実証的なものを中心に一通り網羅されているが、間接的に関係する文献、とくに、海外のものを中心とした談話分析やナラティブにかんする理論的な文献を広く参考にしていれば、本論文の特長である実証性と、談話分析の理論的背景との連関が強まり、研究により一層厚みと深みが加わったように思われる。

第二に、考察の観点として選ばれなかったもののなかに、重要なものが存在した可能性がある点が挙げられる。

これまで日本語学習者の語りの談話を研究する場合、話題の連続性、視点、テンス・アスペクト、モダリティ、連体修飾節などを扱うものが多かったが、本論文では扱われていない。しかし、こうした観点を取り入れれば、論文に説得力が増したのではないだろうか。

たとえば、日本語学習者の表現上の特徴を明らかにすることを目指した第3部第5章では実質語の選択が問題にされているが、実質語の選択一つ一つがばらばらに扱われている印象がある。こうした実質語の選択を話題の連続性として問題にしたり、誰の目から見た描写かという視点の選択を問題にすれば、日本語学習者の一貫した動的な語彙選択の傾向が、より鮮明にとらえられたように思われる。

第三に、中国語を母語とする日本語学習者の表現選択、構造選択の特徴を、不自然さという見方を排して明らかにしようとするあまり、ある表現を使えないのではなく、使わないという前提に無自覚に立ってしまっている点が挙げられる。

たしかに、今回の調査対象者の日本語力はかなり高いレベルにあるが、母語話者が選択したものの中に、学習者は理解はできても完全には習得できていないため、自信がなくて使えなかったものがある可能性がある。その意味で、本論文を第二言語習得研究という観点から考えると、手続きに甘さがあった点は否めない。こうした点は丁寧にフォローアップ・インタビューをしていれば防げたのではないだろうか。

しかし、このような問題点が存在するとはいえ、本論文が示した斬新な問題提起と、それを可能にした方法論の価値を否定することはできない。本論文が日本語学習者の語りの談話の研究に、独創的な知見を加えたことは疑いなく、日本語教育学の基礎研究として高い水準にあるものと言える。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

2012年3月14日

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
イ ヨンスク

2012年2月23日、学位請求論文提出者、烏日哲氏の論文「中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造 ―日本語母語話者との比較を通して―」にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、烏日哲氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、烏日哲氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。